

日本学術会議 哲学・倫理・宗教教育分科会がとりまとめた「提言 未来を見ずえた高校 公民科倫理教育の創生―(考える「倫理」)の実現に向けて―」は、「「倫理」を学んでいる生徒は、全体の三分の一程度かそれ以下」(四頁)、「東京都のように二十数年にわたって「倫理」を専門とする教員の採用が行われてこなかった」(五頁)などといった「倫理」が置かれている厳しい現状と課題を浮き彫りにしつつ、国内外において「考える倫理」の実践に取り組む豊富な事例を紹介し、今後の「倫理」の再興に大いに期待できるものであった。「倫理」が置かれている厳しい現状は、中等教育において「倫理」と最も近接する宗教・宗教学の危機であり、すべての宗教者・宗教学者が共有すべき課題でもあろう。

①藤原聖子氏「サンデルが宗教の授業をするとどうなるか―英国宗教科の新展開―」

前述した分科会の幹事を務められ、本パネルの司会も担われた藤原氏は、英国宗教科における、宗派教育↓異文化理解教育↓市民性教育という変遷を追い、その現状と課題について報告された。英国では、いじめ・死刑制度・安楽死などの社会問題を取り上げ、各宗教はいかにそれらを捉えるかを生徒に考えさせ、英国の価値の共有に主眼をおいて授業を進めるという。わが国「倫理」教育の遙か先をいく英国の現状に感歎すると共に、宗教や信仰についての知識そのものが圧倒的に不足しているわが国の現状と、英国の価値に比すべき日本の価値を措定することの困難さが予想され、それらの克服が喫緊の課題となろう。

②ヨーン・ボルプ氏「デンマークの宗教教育における仏教とイスラームの表象」

デンマークの宗教教科書の執筆も担当されているボルプ氏は、デンマーク宗教科において、一九七五年を境にして、ルター派の教義に一致したキリスト教宗派教育から知識・哲学・市民性教育の融合体へ移行したこと、あわせて、自身が実践しているユニークな仏教教育の実践例を報告された。氏の発表を通じ、多くのデンマーク人のキリスト教信仰が薄れ、教会に通う人々の数が減っているという現状を知り、改めて近代社会と信仰との協調の困難さを知らされる一方、デンマークでは、大学において宗教学を専攻した者が宗教科を担当する教諭となり、あるいは、全教諭が宗教科基礎コースの受講を義務付けられているという宗教・宗教科への国家による丁寧で手厚い姿勢に驚かされた。その一方、多様な宗教・宗派が併存するわが国へのそうした制度の導入には多くの困難が予想されよう。

③土井健司氏「私たちは誰を愛するのか―生命倫理におけるキリスト教的視点―」

命と宗教の問題を広く取り上げ、キリスト教信仰に基づいて発言を重ねている土井氏は、公民科において取り上げられてきたさまざまな命を巡る教材とその実践例を広く紹介された。「宗教者が発言すれば何でも宗教的というわけではない」「宗教的生命観はときに極端な境地を語る。これをそのまま生命倫理に応用することは危険」「宗教者が宗教との関わりにおいて発言するからこそ、宗教的と言えるようになる」という氏の言葉は、私自身が多くの場面で目の当たりにしてきた憂うべき現状に対する真摯な警鐘であり、ともすると特定宗教・宗派の「宗我」に固執してしまふ宗教者は常に自戒しなければならぬ姿勢である。牧師でもある土井氏の言葉には重みがあり、私自身も、同様の視点でこれまで発言を重ねてきた者である。今後、宗教・宗教学ともっとも近接する「倫理」の再興を目指すにあたり、宗教者自身が互いの信仰や思想信条を尊重し合う姿勢を維持することは不可欠であり、そうした手続きを齟齬なく進めていくフレームワークの作成が急務となろう。

以上、三氏の貴重な発表に対するレスポンスに代えたい。どこまでも「倫理」の再興と宗教学の発展を念頭に置いたものであり、先生方には、失礼の段、ご海容いただきたい。